

# 日本剣道形 太刀の形解説 四本目

項目	四本目
動作の解説	<p>① 打太刀は八相の構え、仕太刀は脇構えで、互いに左足から(1)進み間合に接したとき、打太刀は機を見て八相の構えから、(2)諸手左上段に、仕太刀もすかさず脇構えから、諸手左上段に変化して、互いに右足を踏み出すと同時に、十分な気勢で相手の(3)正面に打ち込み、切結んで相打となる。  注(1)歩幅は、やや小さく三步進む。  (2)諸手左上段に振りかぶる程度は、両腕の間から相手の体が見えるぐらいである。  (3)相手の正面に打ち込むときは、諸手を十分伸ばすこと。四本目は大技を示したものであるから、大きく伸びるようにするのがよい。それだから間合のとりかたには、特に注意しなければならない。</p> <p>② (1)相打となつてからは、双方同じ気位で互いの刀身が鑄を削るようにして、自然に相中段となり、打太刀は機を見て刃先を少し仕太刀の左に向け、右足を(左足もともなつて)進めると同時に、諸手で仕太刀の右肺を突く。  注(1)相打ちになつた時、間合が近すぎる場合は、打太刀がひいて間合をとる。</p> <p>③ 仕太刀は、左足を左前に、右足をその後ろに移すと同時に(1)大きく巻き返して打太刀の正面を打つ。  注(1)左拳を頭上に上げると同時に刃先を後ろにして巻き返す。</p> <p>④ 打太刀は左足から、仕太刀は右足から、十分に(1)残心の気位を示しながら相中段になりつつ、抜き合わせた位置にもどり、剣先を下げて元の位置にかえる。  注(1)二本目と同じように形に表さないで、十分な気位で示すことがたいせつである。</p>
指導上の留意点	<p>1 双方共に遠間の面の相打ちであるから、十分な気勢をこめ、面打ちの原形で切り結び、気位は五分であることを理解させる。  2 仕太刀が打太刀の突くはなを巻き返すので、打太刀の上体はやや前がかりとなる。</p>
審査上の着眼点	<p>打 八相の構えから、一拍子で諸手左上段に変化し、仕太刀の正面の高さまで打ち下ろし、切結んで相打ちとなっているか。  打 鑄を削るようにして相中段、一足一刀の間合となり、刃先を少し右に向け仕太刀の右肺を突いているか。  仕 脇構えから、一拍子で諸手左上段に変化し、打太刀の正面の高さまで打ち下ろし切り結んで相打ちとなり、気位は五分となっているか。  仕 打太刀が突いてくるはなを左拳を頭上に上げ、刃先を後ろに向けて巻き返し、正面を打っているか。  仕 充実した気位で残心を示しながら相中段になっているか。</p>
八相の構え	<p>諸手左上段の構えから、そのまま右拳を右肩のあたりまで下した形で、刀をとる位置は、鏝を口のの高さにし、口からほぼ拳一つ離す。構えるときは、左足を踏み出し、刀を中段から大きく諸手左上段に振りかぶる気持で構える。刃先は相手に向ける。</p>
脇構え	<p>右足を後ろにし、左半身となり、刀を右脇に剣先を後ろにし、刃先は右斜め下に向ける。剣先は下段の構えより少し下げた位置にとる。構えるときは、右足をひきながら、刀を中段から大きく右脇にとる。特に刀身が相手から見えないように構えなければならない。</p>

出典:全日本剣道連盟「日本剣道形解説書」より